

# ひらやま 五号

※ 今月は新聞掲載作品です。どうぞご覧ください。

「弟とてもすごい」

六年 柏田 莉子

私には5さいになる弟がいます。私が1年生の時に生まれました。あんなに小さくて泣いてばかりだった弟が、今では私のむねの高さまで背がのびて、言葉もたくさん話せるようになりました。私とけんかをして、負けずに言い返すようにもなりました。

そんな弟が、この前5さいのたん生日をむかえました。そのお祝いに家族でサーカスに行きました。サーカスの入口では、大車輪の体験がありました。私が、「乗りたい!」と言うと、弟も「乗りたい!」と言って、私のあとをついてきました。

直前になると私はこわくなって、並んでいた列からなれてお母さんのところへ戻りました。でも弟は、全然こわがらずに列に並んでいました。いよいよ弟の



順番がきて乗ったとたんにこわくなったみたいです。ずっと「降りたい!」と言って泣きそうになっていました。でも、体験の中で降りることはできないので、最後まで泣かずに乗ることができてとてもすごいなあと感じました。

「まいごのかぎ」を読んで

三年 森本 勇雅

ぼくはこのお話がすきです。なぜかといういろいろな出来事がおきておもしろいからです。バスがくるくるまわったりベンチが大きな犬の様に動いたり。いろいろあつておもしろいです。ぼくが、すきなのはあじの開きにかぎあながある場面です。とくにすきな所は、あじの開きが小さいかもめのようにはばたくところなんです。

なぜかというところ、そんなことがありえるわけがないのに、このお話ではあるところなんです。そもそも、このお話は、ぜったいにげんじつでおこらない出来事がおきています。それがこの話のとくちょうです。四十六時八百七分という数字が出て来るのがすごくおもしろかったの、もっと読んだりして、このお話しの良いところを見つかけたいです。



学園俳壇

水たまりぼたんぼたと歌ってる

五年 戸高 夏海

